第 13 回　大賞(金の星賞)受賞作品

「シンフォニー」

神奈川県　公文国際学園高等部 1 年　原尾　勇貴

賢　治　の　ま　ち　か　ら

全国高校生☆童話大賞

大賞〈金の星賞〉

シンフォニー

神奈川県 公文国際学園高等部一年　原尾 勇貴

今にも崩れそうな廃墟と化した塔に一人のボロ布の様な老婆が現れた。
彼女の皺(しわ)だらけの手には、古いバイオリンが携えられていた。
ここへ来ることは彼女の毎日の日課となっていた。
「今日は遅くなってごめんねぇ。またいつもの曲を聴かせてあげるからねぇ」
彼女は掠(かす)れた声でそう言うとバイオリンを静かに弾き始めた。

昔、風の村に音楽好きな少年がいた。
村には、その名の通り、たくさんの風車が林のようにつっ立っていた。村のどこにいても風車羽根の回るギコギコという音を聞くことができた。
少年はそのギコギコに合わせて、口笛や草笛を吹いて育った。
大人までもう一息というところまで背が伸びた今では、自作の笛で彼自身の新しい曲を作るようになっていた。
少年がいつものように、村の北にある丘で笛を吹いていると、数人の男がレンガを運びながら通りかかった。
「おい、お前も『ツッツキ塔』を組み立てるのを手伝えや！」
少年が笛を吹くのを止めて見上げると、汗まみれで恨めしそうにこちらを睨(にら)んでいる男達の顔があった。
「ツッツキ塔？」
「ああ、そうだ！　お前の親父さんは風車塔作りの名人だったろうが。お前が手伝ってくれりゃあ、もっと高い塔が建てられる！」
「風車塔作りなら手伝うけど、戦の為の塔なんて御免だね」
すまして答えた少年に男達は激昂した。
「今のご時世に風車塔だと？　どんどんツッツキ塔を建てねぇと、西国のハジケウリがこっちに入っちまうだろうが！」

風の村は、長らく争う西国との国境にあった。痩せた砂地が多く、それでいて風にも恵まれていない貧しい西国は、風の村を何度も侵そうとしていた。

「西の奴ら、昨晩も国境線あたりにたんまりとハジケウリを埋めていきやがった！」

ハジケウリは西国の危険な植物だ。地中の硝石とアンモニアを吸収して火薬の一種を作り出す性質を持っている。地中で果実が熟すと可燃性のガスで風船のように膨らむ。そして少し刺激を与えただけで爆発し、固い殻と種子を辺りにまき散らすのだ。

「西国がハジケウリを兵器利用するのは残念だけれど、ツッツキ塔だって褒められたものじゃないでしょう」

少年が男達を睨んで言った。

羽根の無い風車塔のような形のツッツキ塔がいまや国境にズラリと建てられていた。

爆発が届かない高所から長い棒で地中のウリを突き爆破する監視塔だが、ウリを埋めに来る西国の兵士を突き殺すのにも使われていると言われていた。

「彼らの食用サボテンを挽く代金を安くしてあげればいいんですよ。儲かる自国の小麦ばかりに風車を使って、法外な代金を要求するから西国も怒るんでしょう？」

すると男達の一人が少年の胸倉を掴んで怒鳴った。

「ふざけるな！　奴らのハジケウリで何人が死んだと思っている？　俺の弟もな……」

男の抗議は、憤怒のあまりに言葉にならなかった。

そんな男に少年は毅然と言った。

「ぼくの両親もハジケウリで死んだんだ。でも二人ともきっと天国で話し合いを望んでいるはずだ」

神妙な顔つきになった男達は不満げながらも去って行った。

「ちっ、腰抜けが！　西国の女と付き合っているからそんなことを言うんだ。親父さんも浮かばれねぇぞ」

男達の罵声を無視しつつ少年は呟いた。

「憎しみは新しい憎しみを呼ぶだけだ。なぜそれが皆分からないんだろう」

少年が家に戻ると、部屋は真っ暗だった。
「また明かりもつけずに……」
少年が蝋燭を灯すと、部屋の隅にうずくまっていた幼い妹の姿が浮かび上がった。
妹は少年より二歳下だが、発育が遅れており、もっと幼く見えた。もともと内向的な性格で無口だったが、両親が亡くなってからは全く喋らなくなっていた。
少年は、懐から丸いパンを出した。風車塔の修理賃で買ったものだが、最近、村人は、西国との争いに批判的な少年に冷淡になり、賃金も出し渋るようになっていた。
少年はパンを二つに分けると大きい方を妹に差し出した。
「さあ、お食べ。安物だけどね」
二人でパサパサのパンを齧っていると扉がノックされた。扉を開けると隣に住んでいる幼馴染の少女が立っていた。
艶のある長い髪によく似あう褐色の肌は、西国の人々の特徴だった。隣家は、まだ西国との関係が平和だった祖父の世代に移住してきたのだった。
少女も音楽が好きで、少年の一番の理解者であった。
二人で、西国の特徴的な弦楽器と、風の村の素朴な笛の音を演奏しあい、その融和を楽しんだ。少年は毎日のように、彼女に自作の曲を贈るほど仲が良かった。
少女はもじもじしながら言った。
「二人で丘に行かない？　昼間は快晴だったから星がよく見えると思うんだけど」
少年は頷きかけて躊躇した。
自分が出かけてしまえば、妹を家に一人残すことになってしまう。
だが、そんな兄の背中を妹がつついた。
無言だが、表情の中に「気がねせず行ってきたら」という声が聞こえるようだった。
「ごめんね、お兄さんを借りるわね」
少女も申し訳なさそうに言う。
「ごめん、すぐ戻ってくるからちょっとだけ待っていておくれよね」

少年はしっかりと戸締りすると、少女と二人で丘に向かった。
少女が持ってきた蝋燭の光を頼りに、二人は細い獣道を歩いて行った。明かりは弱く、二人は自然と、はぐれないように手をつないだ。
丘に登ると少女は蝋燭を消した。あたりが真っ暗になって、繋いだ手の温かみが強く感じられた。闇の中から少女の囁(ささや)き声が聞こえた。
「折角(せっかく)だから二人でいっせーのーせで上を見ましょうよ」
「わかった。じゃあ、いっせーのーせっ！」
二人は無言になった。
見上げた夜空には、こぼれ落ちそうなほどの星々がまんべんなく散りばめられていた。
少女が草原に仰向けに寝転んだ。
少年も隣にごろりと寝転ぶ。
「星が降ってきそうよね」
「うん、そうだね」
まるで星々と自分が融和した様な不思議な一体感が感じられた。
「綺麗だなぁ、こんな夜空を見るのは何年ぶりだろう。最近は戦争で空を見る余裕すらなかったからな。昔は平和だったよ」
「そうね……祖父の時は西国から移住する人が沢山いたのに」
「いつから戦争するようになったんだろう」
再び沈黙が訪れる。
少女は身を起こすと柔らかい声で言った。
「ねえ、今日はどんな曲を聴かせてくれるの？」
少女に応え、少年は笛を取り出した。
「実は、前から考えていた西国と風の村の音楽の良い所を合わせた曲が、出来上がったんだ」
少年が夜空に捧げものをするように笛を高く掲げ、そして吹き始めた。
繊細で柔らかな音が丘全体を包み込む。
夜空に煌(きら)めく星の輝きも相まってとても幻想的だ。
少女はそんな音に目を閉じて耳を傾ける。
聞いているうちに少女の目から涙がこぼれ落ち始めた。少女はそれを拭(ぬぐ)おうともしない。

「ど、どうしたの？」
驚いた少年が訊ねた。
「やっぱりあなたの曲って素敵。すごく優しくて癒されるわ。だけど……」
「だけど？」
「何で、人々はこの美しい曲みたいに融和しあうことができないとかと思ったら悲しくなったの」
西国出身の少女も、隠れた差別や嫌がらせを受けているに違いない。少年は少し考えてから微笑した。
「ありがとう。君に気に入ってもらえるなんて嬉しいよ。こんな曲ならこれからもいくらだって作ってあげるさ」
そんな少年の屈託の無い笑みが少女は大好きだった。

翌日は村を挙げての祭りだった。
少年が妹と市場を歩いていると、ハジケウリの殻でできた人形が売られているのが目に入った。
人形には西国に対する悪口が嫌というほど書かれており、少年は思わず顔をしかめた。
しかしキラキラと虹色に輝く殻は人気が高いらしく、人形はあと一体しか残っていなかった。
そのまま通り過ぎようとすると妹が少年の袖を引っ張り、欲しいと目で訴えてきた。
「駄目だよ。他のものはいいけど、あれは」
妹が見せた悲しそうな表情に、少年の心は痛んだ。
そうこうするうち、人形は他の女の子に買われていってしまった。
買っていった女の子の背中を涙目で見つめる妹の背中を少年は黙って撫でてやった。
その日の晩、国境付近に小さな影があった。
少年の妹が、こっそり家を抜け出して国境付近に来ていたのだ。
どうしても人形が欲しくてハジケウリを取りにきたのだ。
彼女は籠から折り畳み式の鉄棒を取り出し、自分の身長の三倍ほどの長さに伸ばした。

地中に埋まっているハジケウリを素手で探すのはあまりに危険なので作られたものだ。
もっとも人が地上で棒を使うことは、西国が持ち込むハジケウリがどんどん大きくなってきていることから危険とされ始めていた。
だからツッツキ塔が作られているのだ。
妹は、棒の先を地面に当て、横へ、縦へずらしていく。夜の荒地に棒の擦れる音だけが響き渡った。やがてコツコツと硬い物が当たる感触が伝わった。
妹が、パァッと表情を明るくさせたのも束の間、彼女の想像を遥かに凌ぐ爆風が彼女を襲った。

妹が死んだ。
その事実は少年を絶望させるのに十分だった。筆舌に尽くしがたい程の闇がゆっくりと足元から体内に侵食していった。
そして、少年は全てを拒絶するように家にひきこもり、曲も作らなくなった。
ひと月ほどたって、少女は、久しぶりに少年が丘の上に出てきているのを見た。嬉しさに駆け寄った少女は驚きに足を止めた。
やせこけて人相が変わった少年は大量のレンガを積み上げて、何やら建物のようなものを作っていたのだ。少女は不安におののきながら聞いた。
「何を作っているの？　妹さんのお墓？」
聞いても、無表情な少年は何も答えず黙々とレンガを円柱状に積み上げていく。
「がっはっは、ツッツキ塔だろう。妹が死んで気が変わったんだろう。感心なことだ」
近くにいた村の男が満面の笑みで言った。
するとボソリと少年が答えた。
「違う……これはツッツキ塔じゃない」
少年の声はまるで幽霊のようだった。
「これは……妹や家族みんなともう一度会うための……。天国につながる……塔だ」
少年の鬼気迫る様子に男達は気圧されながら言った。

「な、何が天国だ。身投げ用の塔を作ってるってことか。ああ、そりゃいいかもしれねえな。お前が死んだ後はツッツキ塔として有効に使ってやるぜ」
背を向けて作業に戻る少年に少女は声を掛けられなかった。少年の家族を奪ったのは、自分の故郷である西国であることは間違いなかったからだ。

そして更に半月ほどが経った晩、少女は、塔が完成したと聞いて、丘に駆け付けた。
そこで少女が見たのは、村中の人々が武装して集まっている光景だった。彼らは同じように大勢で駆けつけてきた西国の兵達と対峙(たいじ)していたのだ。
「西国の奴らめ、あいつが作った塔を壊しに来やがった」
「どのツッツキ塔よりも高い塔だからな」
「窓もたくさんあって、ツッツキ棒を何本も繰り出せるぜ」
村人の誰一人として少年の安否を心配する者はいなかった。
少女は必死で人ごみをかきわけて塔の入口の戸に飛びついた。少年がいつも風車に使っていた合鍵を使うと簡単に戸は開いた。
後ろ手に鍵をかけて塔内の空洞を見上げた。
「なんて……きれいなの」
少女は思わずつぶやいた。
塔の内壁に数多く取り付けられたステンドグラスでできた窓から差し込む月光が、上へと伸びる螺旋(らせん)階段を幻想的に照らしていた。
上の方から足音が響く。見上げた少女は螺旋階段を上りつつ少年の姿を探した。
少年がやっているのだろう、窓が開かれる音がした。ステンドグラス越しではない強い月光が差し込み塔内を照らした。塔の内部全体が神々(こうごう)しい光を放っている。
少女にはそれがまるで天国への道の如く見えた。
ああ、彼はやはり天国へ行ってしまうんだ。
そう思うと悲しくなって螺旋階段を上る足から力が抜けていく。
すると、上の方から少年の声が降ってきた。
「さあ、君も窓を全部開けるんだ！」
意外にも少年の声は生気に満ち溢れていた。

えっ？　天国へ行くんじゃないの？
少女は不思議な心持ちのまま窓を次々に開けていく。
何故、窓を開ける必要があるのだろう、通気性を良くするためだろうか。
「さあ、これで最後だ！」
そう言うと少年は一番上の天窓を開けた。
少女は少年に引き上げてもらい屋上に出た。
そこには小さな風車があり、大小の歯車を経由して何本もの綱が塔内に伸びていた。
見下ろすと、外では巨大な塔を壊そうとする西国の兵達とそれをさせじと集まった村人達が睨みあい一触即発の雰囲気になっていた。少年に向かって「飛び降りろ」と怒鳴るものもいる。
「ねえ、この塔はいったい？」
少年は、唇に人差し指をあて少女の問いを封じた。そして両手のひらを耳の後ろにあてるジェスチャーをした。
やがてそよ風が少女の髪を撫ではじめた。
風は次第に強さを増し、ついには突風になった。と、同時に高い音が丘に響き渡った。
「これは……笛の音？」
少女は驚きに口を抑えながら呟く。
塔は丘を吹き抜ける風を利用した巨大な笛だったのだ。屋上の風車と歯車が綱を引くことで、窓の開く角度を変え、音の高さを調整しているらしい。笛の音はオルゴールのように、ある曲を奏でていた。
それはいつの日か、丘の上で少年が少女に贈った曲だった。
西国と、風の村の音の美点を合わせた曲は、群青色のペンキで塗りつぶしたかの様な空に響き渡り、輝く星々達はそれを祝福した。
その時、少女は少年の伝えたかった事を理解した。
「この曲は鎮魂歌なのね。ご両親や妹さんだけでなく、今まで戦場で散っていった人々全員にむけた……」
両国の曲の良い要素を含んだ旋律に不思議と兵士達は武器を落としていった。
いつかの少女がそうだったように誰もが大粒の涙を流していた。

「こんなに美しい旋律があっただなんて」
「ああ、争うのがバカバカしくなったぜ」
彼らは笑顔で握手をした後、それぞれの方角へ悠々と去って行った。
「あなた、戦争を止めるために塔を建てていたのね」
少年は安らいだ表情で少女に向き直った。
「僕らは誰もがいつかは死んでしまう。でも平和を祈る曲は死ぬことはない」
「……ありがとう。この曲大事にするわ」
少女はバイオリンをとり出し、万感の想いを込めて合わせて弾いた。

バイオリンを弾き終えた老婆は、夜空に向かって言った。
「あなたにこの塔の曲を送られた日からもう五十年も経ってしまいましたね……」
五十年の月日がたつのは瞬く間だった。
実際には、争いは簡単には終わらなかった。
苦闘の末に平和を得たものの、少年自身は和平活動中にハジケウリで命を落としていた。
そして少女は皺だらけの老婆となった。
「この塔も随分と古くなりましたねぇ。もう、音も鳴らなくなりましたし……」
塔は風化し、音が鳴る仕掛けも全て使い物にならなくなっていた。
「あなたの曲は今まで何度も演奏してきました。でも、あなたと一緒には弾けなかった。それが悲しかったの」
すると、俯(うつむ)く彼女の目の前に誰かが立ち、手を差し伸べてきた。見上げればそこには死んだはずの少年が微笑んで立っていた。
老婆は驚きながらもその手を取る。
「また……あの曲を聞かせてくれるのね」
少年が手を挙げるとたちまち周囲に風が吹き始め、廃墟と化したはずの塔が、また笛として音を出し始めた。
いつしか少女の姿に戻った老婆もバイオリンを取りだし、合わせて弾いていた。
笛の音とバイオリンの音が融和する。

夜の闇に沈んでいた景色を白い光が覆い尽くし、五十年前の世界を創りだした。彼女は少年と共にその風景を眺め、再び涙した。

「あなた、これからも私達はずっと一緒よ」

少年は頷いて少女の手を取った。

少女も少年の手を握り返した。

塔の上から下を見下ろす二人の姿はやがて霧にかき消されて消えた。

夜空に二つ流星が寄り添って流れた。